

# 諸商品集成の感性的直観（その一）

——「資本論冒頭文節の体系的意味」<sup>1)</sup>の第三章として——

梯 明 秀

- 一、脚註第一の論理的意味、
- 二、河上博士の解説の批判——（以上第二卷第一号）、
- 三、諸商品集成の感性的直観——（本号）、
- 四、重商主義における貨幣の直接性——（以下後号）、
- 五、古典学派における労働の媒介性、
- 六、悟性的範疇としての要素的商品、
- 七、端緒的商品における媒介性、
- 八、資本の結果としての現実的商品と実践的直観の立場。

## I 疎外的実存としての物

資本論冒頭文節の第一句を二段に分ち、第一段の、「資本制的生産様式が支配的に行はれる諸社会の富は、一つの老大な諸商品の集成として現れる」という命題における「現れる」とは、われわれの感性的な直観的意識に現象することであり、第二段の、「個々の商品は、かかる富の要素的形態として現れる」という命題の「現れる」は、エレメントなる抽象的思惟規定が、われわれの悟性的意識にさしあたり先ず現象するとすべきであり、したがって同じく「現れる」と言表されてあっても、第一段の命題と第二段の命題とは、それぞれの主語となっている対象が、現象するがままに受け容れる場所としてのわれわれの意識形態を異にするという点で、相互に区別さ

れねばならない。これが、第二章までの論述によって導いてきたわたしの主張内容であった。そこで次に、區別された両命題の統一的把握を目指す本稿の最後の目的からしても、当然ながら両命題の意味するそれぞれの立場に試みに徹底して見ることによって何が帰結されるかを吟味する必要があるわけであるが、本章においては、順序にしたがって第一命題の吟味を試みることにしたい。この命題の意味するところのものが何であり、何を要請しているかを問題にすることは、しかし、この命題自体が果して論理的に可能であるか否かに制約されている。

1、本節は本誌第二巻第一号に掲載した「資本論冒頭文節の体系的意味」の第一、二章——従前の「節」を「章」に改め、「分節」を「節」とする——に続くものであるが、本章だけでなく今後とも、独立の論文とまでは行かないにしても、各章ごとに切り離して読んでも理解しうるように努めたし、努める予定である。したがって、本号における標題も、本章の標題をもって代え、総標題は副題としておいた。なお総標題のもとにおける全労作が何を目的として如何に経過してゆかを示し、部分的な各節のみによる誤解を避けておくため、各章の標題を掲げておくが、章数、標題に若干の変更はありうることである。また本論稿の完結を早めるため、切り離す可能性のある章は、これを他誌に発表することも考えている。なお本論稿が窮極に何を意図しているかは、各章の標題から或る程度の推察は不可能ではないが、明記すれば、拙著『資本論の学問的構造』第一論文第五節「資本論における哲学と科学との一致」の所論を、冒頭文節の角度から見ただきりの内容として、基礎づけることが、それであるから、未発表の各章を推測する必要あるばあいは、右の個所の検討において批判されても、誤解に導くことはないはずである。

2、第一および第二章において、eine ungeheure Warenammlungの訳語を、諸商品「集積」としてきたが、本章の第五ないし六節の論理的分析にもとづいて、以後、河上博士による訳語としての「集大成」にしたがい「集積」として変更することにした。すなわち、Warenammlungは、感性的に直観されるとしても、単に知覚の対象としての集積された諸商品でなく、構想力によってのみ構成されうる一つの全体としての形象でなければならぬからである。この原語に添うていえば、

単に zusammenbringen されて眼前に存在する Gesamtelles ではなく、zu einem Ganzen vereinigen というわれわれの  
綜合力を前提した全体表象でなければならぬからである。訳語の変更にあたってその理由を簡単に予告する次第である。

初めに文章上の構造についてであるが、動詞「現れる」を修飾している「一つの大きな諸商品の集成として」  
の位置を変え、主語、「資本制生産様式が支配的に行はれる諸社会の富」、略して「資本家的富」あるいは単に「資  
本」の修飾語としても、文法的に許されること改めて断るまでもない。そして、「一つの大きな諸商品の集成」  
とは、諸商品の集積が一つの全体性を形成していることであり、この「一個の全体としての諸商品集成」がその  
まま「資本あるいは資本家的富」であるというのであるから、この修飾語を主語としても文章上の意味にも何ら  
変りはないはずである。そこで、動詞「現れる」は前述のとおり「われわれの直観に感性的に現れる」の意味で  
あるので、以下、論理的分析のために第一段の命題を次のごとき文章として、分析を進めてゆくことにする。

——「諸商品の集成としての資本家的富は、われわれの感性的直観に与えられる。」——あるいは

——「資本家的富すなわち一つの全体としての諸商品集成は、感性的に直観される。」——

すなわち、感性的に直観される対象が、資本家的富であり諸商品集成であり、したがって個々の商品でもある  
ということである。一般に、われわれの感性的直観に与えられ知覚されるものは、外的な知覚対象として感性的  
な物でなければならない。とすれば、個々の商品は、したがって一つの全体としての諸商品集成も、また資本家  
的富あるいは資本も、いずれも感性的な知覚対象として、すなわち物として、われわれの意識に直接的に与えら  
れるかに思はれる。ここに既に問題があるのであるが、とにかくマルクスも、冒頭文節に続く第二文節を、

——「商品は、さしあたり、その諸属性によって人間のなんらかの種類の欲望をみたすところの、一つの外界

の対象——一つの物 ein Ding ——である。<sup>3)</sup>」——

という一句で初めたわけであり、さらに第三卷第五篇第二十四章「利子生み資本の形態における資本関係の外  
面性」の第二文節においても、次のごとく述べている。

——「資本が利子の、資本自身の増殖の、神秘的で自己創造的な源泉として現象する。物 Ding (貨幣、商品、  
価値) が今や単なる物として既に資本であって、資本は単なる物として現象する。<sup>4)</sup> Das Kapital erscheint als  
bloßes Ding。」——

商品あるいは資本を、マルクスが物として最初に先ず規定したのは、単にそれが本章においてわたしが主として問題にするような意味だけのものではなく、資本論全巻を貫く方法論にもとづくものであった。すなわち、商品、あるいは諸商品の全体としての資本が、それぞれ人間と人間との社会関係をいみするはずにかかわらず、それらの外面性においては、われわれには物と物との関係としてしか現れえない、というマルクスの人間労働の資本主義的自己疎外の思想が、そこに底ふかく含まれており、この事柄のゆえに物神崇拜の錯覚を、資本家社会に住んでいるわれわれに、商品あるいは資本にたいして抱かさせるのであり、そして、われわれにこの錯覚を与える現象の背後に、われわれが真実の本質的關係を分析しだすというのが、資本論における科学的方法であった。それにしても、商品、貨幣、あるいは資本の物神的性格は、その論理構造としては、それらの疎外における形態が感性的に知覚される物であるという点に、すなわち、われわれに錯覚を与える現象としての仮象が、感性的対象としてわれわれの外に実存している物であるという点に、重大な意味をもつのであるから、資本論の方法論を把握するためにも、商品あるいは資本が、われわれの感性的直観に与えられるということの徹底的理解は、単に認識

論的な問題として軽視すべき事柄ではありえないであろう。

3、マルクス『資本論』、第一巻、長谷部訳（青木版）第一冊、一一三頁。

4、同右、第三巻、長谷部訳（日評版）第十冊、一〇九頁。

さて、感性的に直観するということは、今、此処に起っている事柄である。今、此処に無い物をわれわれは見る事ができない。眼の前に有る物がわれわれに見られ、見られて意識内容となったものについてわれわれは考える。こうして、われわれの現実の経験というものが成り立つのである。しかし単に眼を閉じて臆測するだけでは現実の経験にはならない。思惟と直観とは、経験になくはならぬ要素、すなわち、その二つの契機であるが、経験が現実的であるための契機は、最初には、直観であるといわれなければならない。思惟がなくては経験が成りたないかぎり、思惟も媒介的には、その現実性のための契機であるに相違はないが、思惟だけを切りはなせば、今、此処を超越したものととして、それは直観と差別され非現実的なものとされねばならない。そこで本章において現実性というとき、それは物が今、此処でわれわれに見られているということ、対象とわれわれの意識とが現在、この場所で相い接触しているということ、を意味せしめておくことにしたい。すなわち具体的な現実性の直接的外面性を問題にしているにすぎないのであるが、この対象と意識との直接している事柄が感性的直観 *sinnliche Anschauung* とよばれているのであるから、感性的直観はかかる現実性ということの本質的規定としていなければならないのである。そして、かかる現実性のゆえに、対象がわれわれの意識に受け容れられ、われわれのものになる、すなわち表象という意識内容になる。かくして、とにかく対象は、それが理解されていると否とにかくならず、感性的直観としてわれわれの意識に与えられ、対象も意識も現実的なものになるわけである。対象がわ

れわれに与えられる *Gesehen* とか、受け容れられる *aufgenommen* とかといわれていることは、対象がわれわれに現れるということの最初の直接的意識形態であつて、感性的直観のことを意味せねばならない。そしてまた、直観が外にある対象を内へ受け容れるのは、感性的でしかありえないのであるから、対象にたいして感性的であること *Similichkeit* は、直観の所与性、*das Gegebene* もしくは受容性 *Receptivität* と *Empfangen* と同一である。

5、ヘーゲルによれば、「現実性とは、本質と実存との統一、あるいは内的なものと外的なものととの統一が、直接的な統一となったものである。……現実的なものは、直接的な外的実存のうちにあるかぎりにおいてのみ、本質的なものである」と説かれている（ヘーゲル『小論理学』一四二節（松村一人訳岩波文庫版、八一頁）。すなわち外的直接性における本質と実存との統一が現実であるが、対象と意識との対立関係にこのヘーゲルの規定をもつてくれば、この外面性がわれわれの意識に直接的事から、当然それは、感性的であることを本質的規定として現れてくる。この点、カントの現実性の規定の方が明瞭である。カントは「原則的分析論」において「経験的思惟一般の要請」として、「一、経験の形式的制約（直観および概念に関する）と一致するところのものは可能である。二、経験の質料的制約（感覺）と関連するところのものは現実的である。三、現実的なものとの関連が経験の一般的制約にしたがって限定されているものは必然的である」〔純粹理性批判〕天野貞祐氏訳岩波文庫版、二八一頁）としている。しかし、可能的なる本質が現実的な現象に常に不離な関係にあるとするとともに、すなわち事態を常に必然的なものと見るところに、ヘーゲルの立場があるのである。このいみでヘーゲルの「現実性は、外面性のうちで自分自身に反省しており、その定有は自分自身の顕現であつて、他のもののそれではない」（前掲、同頁）という言葉に注意せねばならない。しかし本章における現実性は、その外面的直接性を特に重要視するのであるから、次のヘーゲルの言葉は念頭においておくことは理解を深めるに役立つであらう。――「前に直接的なものの形式として有および実存があらわれた。有は、一般に無反省の直接態であり、他者への移行である。

実存は、有と反省との直接的統一、したがって現象であって、根拠から出て根拠へ歸る。現実的なものは、この統一の定立されたものであり、自己と同一となつた相関である。——すなわち、同じく直接性の形式であって、自己反省における相互関連を内容にしているところに、現実性の形式の最も具体的である所以があるのである。

ところで、当面の問題としては、「資本家の富が、すなわち一個の全体としての諸商品集成が、物的対象として、われわれの感性的直観に与えられる」ということが、果して可能であるか何うかということであつたわけであるが、この問題が単に、かかる物的対象がわれわれの感性的所与であるということの可能性の問題にすぎないものならば、その感性的直観の現実性を反省すれば何らの論証のいらぬ自明の事柄であるかに見える。すなわち、われわれは現実はこの資本家社会にわれわれ各自の生活を現在いとなんでおり、この資本家的な社会環境にあつて何らかの経済的活動をすることによって、それぞれ自分の日常の生活を今、此処に根拠から支えている。

このような現実の体験には何らの疑いのいれようはない。さらに、この日常の経済生活において、これが関連してゆくところの一つの全体としての社会としての社会環境を意識の対象として念頭に浮べているし、この現在の現実の資本家社会において富が、自分たちの欲望を満足させてくれるはずの富が、自分たちの手許には無くて他人の許に蓄えられて有ることも、われわれのこの社会の大多数の人々が直接に体験しているところである。自分たちの生活環境として今、此処に現実存在するこの社会が、「資本制的生産様式が支配的に行われている社会」であるか何うかを科学的認識をつうじて理解しているか否にかかわらず、資本家の富が彼処に蓄積されてゆき、貧困は此処のわれわれの仲間のうちに深まっていくことを、われわれは色々な現象で経験してきている。しかも、この資本家の富についてのこのような経験内容は、商品の諸現象をつうじて誰しも体験している事柄であろう。

たとえば、われわれが何らかの欲望をみたそうと思えば、「貨幣を持って——河上博士のいうごとく——デパートに行けば、有用性をもったものが何でも手に入る」。これらの有用物は貨幣と交換さるべきものとして、すなわち商品として、一つ一つ違った価格がついている。何らかの有用物を商品として購入するだけの貨幣を手許にわれわれが所持していないときには、われわれは働くことによって貨幣を俸給なり賃銀として先ず手に入れることをせねばならぬ。要するに、大衆の欲望を満足さすべき社会的な一切の有用物は、商品として、貨幣を媒介にしないでは大衆に接近していかないもの、かかる諸商品の集積としての富は、大衆には疎遠なもの、大衆にとって疎外された物であるということは、誰しも各自の体験で熟知している事柄である。そうすると、第一段の命題の意味する内容は、現実的に自明の事柄として、改めてその可能性如何を問うがごときは、不必要にしてナンセンスな問題提起であるかにも見えよう。

しかも事実において、かかる日常の現実的な体験を基礎にしてわれわれは、各自の人生観を直接的に自覚し、社会的環境に対処する行動あるいは実践の原理として、それを心に秘めているわけである、にもかかわらず、このような常識の世界を超え、この環境としての資本家的社会の科学的分析を媒介にして、大衆各自の主観的的人生観を客観的な世界観に転化せしめ、この世界観による実践によって社会環境を変革せしめんとしたのが、マルクスの実践的のみならず理論的な立場であり、資本論の学問的な本来の意味でもあった。資本家社会の対象的分析を経済学に求めたところに、資本論の経済的科學である所以があるのであるが、プロレタリア大衆の世界観の叙述としては、資本論は同時に、哲学を直接的なものとして叙述体系の底に秘めているごとき学問的構造にあるとせねばならなかった。そして、資本論全三巻をつうじてのかかる体系的叙述を、一貫する方法論が、冒題文節に



書かれてあるごとく商品の分析から始まるわけであるが、しかし本節において特に留意すべきことは、この端緒的商品が感性的な物として現れる、という一般的规定から、マルクスは、その論述を出発せしめているというところである。しかも、このことにこそ既に、われわれは、マルクスの世界観、すなわち、賃労働者の資本主義的自己疎外という哲学的思想の、最初の露頭を見なければならぬのである。そして、この疎外の形態が、その外面性において、あたかも商品という感性的な物としてわれわれに対立するがゆえに、同時に科学的分析の対象になっているのであった。<sup>5)</sup> このような学的体系において、冒頭文節が如何なる意味をもっているかを、分析せんとする本稿の意図の出発点として、今その第一句の第一段の命題を吟味しようとしているのであるが、資本家の富の感性的直観としての現実的資本のこの外面的直接性の問題にかかわるかぎりにおいても、資本論全三巻にわたる体系的叙述を予じめ展望しておくことは、この外面的直接性の契機の理解にとっただけでなく、当面の命題の意味するところのものが何であるか推察するために、特に必要と考えられるのである。

5、「もしも事物の現象形態とその本質とが直接に一致しているものとすれば、およそ科学は余計なものであらう」というマルクスの有名な言葉のごとくに。すなわち、資本制社会における本来の人間の自己疎外の事実、社会的現象の物神的性格こそがマルクスの科学的関心、特に経済学への専心を、誘起し刺戟し結実せしめたものである。このことの認識を、資本論第一巻の第一、第二の両節における外的反省の立場による下向的分析の叙述を讀むときに、読者が忘れないならば、資本論の第一節においてさえ既に哲学と科学とが統一されてあり、その統一の仕方が如何なるものであるかを、自覚されるのに困難を感じないであらう。

なお右の有名な言葉が、第三巻第七篇第四十八章で、「三位一体的範式」の仮象を打ち破るために発言されていることは、疎外の形態として物的現象を把握するときの体系的関連を暗示しているのであるが、このことは次節において読者は

理解されるであらう。

6、本稿第二章（本誌第二卷第一号）の註(1)において、「冒頭文節の論理的意思を分析するという水準に、日本の経済学界が進んでいない現状を一つの不思議なこと」としてきたが、たま／＼遊部久蔵氏の『価値と価格』を手にして、その第一篇第二章が「資本論劈頭の商品について」という標題であり、一読して右の註(1)のわたしの感想が危憂であったことを知った。端緒的商品の現在のものか過去のものかの論争について、わたしはそれが戦前にあつた記憶があり、戦後のそれについては未読のままであつたのが事実であつて、したがつて遊部氏の労作を逸する非礼になつたわけで、ここに、第二章第一節の註(1)の補足のいみで、氏の所説を批判しておきたい。拙稿「現実的な学としての資本論」が「思想」誌上に嘗て発表されたさい、遊部氏は、いちはやく、わたしには思ひがけなく、紹介的批判の筆をとられた人であるが、その後わたしは未だに反批判をする機会を作らずに今日にきている。これは二重の非礼である。しかし以下の論述は、この後のいみでの返答のものでない。

氏は先づ「端緒」としての商品が先資本制商品か資本制商品かという論争が既に行れたが、そして或る論者のごときは、もはや今日ではかかる詮索はあまり意義がないかのように述べている（久留間鮫造氏、「評論」二二年二月号）が、私見は、むしろ、かかる端緒の問題を等閑に附して「資本論」の理解は聊かも与えられないことを強調したい。総じてかかる方法論的問題の等閑視こそ、今日までマルクスの経済学を曲解せしめてきたのである」と主張する。この方法論的意識に、そして、その確固たる信念に、わたしは日頃、未検討ながら敬仰してきたものである。

端緒的商品の論理的意思を分析するにあつて氏は、ヘーゲルの大論理学の序論の理解から始める。マルクス自身が資本論の体系化の構想においてヘーゲルのこの序論を念頭においていたのであるから、遊部氏のこの歩み方はオーソドックスなものでなければならぬ。したがつて、氏がヘーゲルの始元論の弁証法を理解したかぎりにおいて、マルクスの端緒的商品にたいする理解も正しかつたし、しかも学の始元という意味から深く理解することができている。すなわち、端緒的商品を直接性と媒介性との統一という論理構造で把握するだけでなく、ヘーゲルの概念の円環運動の止揚としての資本論の体系性にも関わりうるところまで進んでいる。

先ず第一に、「本来、下向と上向との二重の道があるわけでない。上向が唯一の道である。上向してゆくことのうち、下向が実は含まれているのである」という正しい言葉を見出す(五四頁)。これはヘーゲルの次の言葉を理解し得ていたかぎりのものであった。「学問にとって根本的な事柄は、純粹直接的存在がその始元を構成するということよりは、むしろ学全体が自己に戻る円環運動を形成し、この運動においては、最初のものは最後のもの、最後のものは最初のものである、ということである」。この「最初のものから最後のもの」の「前進とは、根拠すなわち根源的にして真なるものへの復帰であって、出発点となるところのものは、むしろこの根拠に依存し、実際は、これによって産出されたものに他ならずということ」である。したがって、ヘーゲルにおいて、最後のものとしての根拠から直接的な最初のものへとは、眞の主体の自覚の過程であり、この主体への直接的なものの接近が、すなわち、基礎づけの過程が前進である(三五頁)。これは、ヘーゲルの『論理学』を構成する体系的論理でなければならぬ。がしかし、それは『精神現象学』の体系的構成の論理と直ちに同一でない。遊部氏はヘーゲルの前進即復帰の思想をヘーゲルそのまま『論理学』の視角からのみ理解している。ところが、資本論は『論理学』と『精神現象学』と学的人格の差異を認めたくえでの両者の統一に成立した体系である。とすれば、『論理学』のみからの資本論理解が一面性にとどまることは明かであって、遊部氏はこの一面性に満足しているのを見る。すなわち、「媒介性」と直接性との同時的存在性を始原と終極との始原における相互依存性」としてのみ把握し、したがって、そのかぎりのものの現れとしてのみヘーゲルの「前進即復帰」の思想を理解するにとどまつて、これをヘーゲルを超えて分析的に理解することを氏は試みてさえいない。このことは、引用を省くが、前掲岡氏著三七頁の第一パラグラフの文章で明かであろう。——それにしても、『精神現象学』の背景の論理が『論理学』であるかぎり、『論理学』は資本論の本質的契機でもある。このことは、ヘーゲルの『大論理学』『序論』における次の言葉において、「哲学においては」の句を「資本論においては」とすれば、そのままマルクス主義的に正しいことから解るであろう。

——「資本論においては(ヘーゲルでは、哲学においては)、前進は寧ろかえって後退あるいは基礎づけとなるものであって、この基礎づけを終るることによつて、先に出発点とされたものが単なる任意的存在ではなく、むしろ実際には真理はあるいは最初の真理であるということが明にされる」——すなわち、端結的商品は真理としての資本の直接性であり、

この抽象的な直接的商品の止揚に媒介的な具体性のある資本がある。そして、遊部氏の資本論の体系性の理解も、このかぎりのものとして、したがって一面的には正当であるが、抽象性をまぬがれない結果となっている。このことの批判は、氏の第二の正しい着想の批判において関連的に明らかとなる。

遊部氏が資本論の体系性を深く理解せんとしている第二の証佐は、右のヘーゲル『論理学』からの資本論にたいする適用的理解から演繹されている。それは、「資本制生産の出発点としての商品と資本制生産の結果としての商品との一致」の着想であり、「もちろん、かかる一致は資本制社会においてのみ行はれる」とした氏の勝れた洞察である。しかしながら、この一致の主張はマルクスのものである。マルクス遺稿「資本の生産物としての商品」は、資本論においてヘーゲルの思惟の円環運動が向上向の方法として如何に批判的に摂取されているかを、マルクス自身によって明示されたものである。超感性的な主体としての純粹概念の円環的自己運動の論理が、感性的に現実的な主体としての資本の円環的自己運動に如何にして適用しうるか、という必ずしも容易でない問題を、遊部氏が如何に解決したかは、全く不明であるというほかはない。そのかぎりで、氏のヘーゲルによる資本論理解も、その深い理解を志しながら、ヘーゲルの外的適用における偶然的一致という外見を払拭しえていない。この意味での着想ではあるが、マルクス自身の遺稿の論理の明快さに導かれて、氏は次のごとき極めて正しい主張を確信することができている。——「なるほど商品は、商品生産および流通は、先資本制社会にも存した。このような意味で、商品は資本の歴史的前提であり、ここに商品から資本へと進む向上法における歴史的なるものと論理的なるものとの並行ないし一致が、ただちに見いだされても宜さそうに思はれる。だが、そうではない。資本論劈頭の商品、始原としての商品は、決して、このような商品——歴史的單純商品——ではありえない、けだし遺稿に述べられてあるように、商品は、それが入生産物の一般的要素的形態であるかぎり————しかり入富の要素的形態（冒頭の一句）としての商品が、いま問題とされているのだ——入本質上、資本主義的生產過程の生産物および結果として現われるから」。かくのごとき入特に明確な歴史的性質Vを得る商品こそ、われ／＼にとつての始原としての商品である。われわれが経済学の研究対象として近代ブルジョア社会に対向するかぎり、遺稿に言はれているように、入資本の不断の要素的前提（存在条件）として現はれると同時に、他方では資本主義的生產過程の直接的結果として現わ

れる」商品が、われわれにとって研究上の始原たるものである」(五五—六頁)。この遊部氏の主張内容は、わたしも独立に、同じく右の遺稿に導かれて、戦前から抱いていたものであり、戦後に、その論理的把握に苦心してきているところのもの——その一応の成果が拙著『資本論における学問的構造』所収「哲学と社会科学」の「資本論における哲学と科学との一致」の一部分となっている——であり、本稿もまた右の一応の成果の基礎づけを窮極の目標としているものである。戦後において、端緒的商品を先資本制商品であるとするにしても、また資本制商品とするにしても、その論述の方法が単にマルクス、エンゲルスの言葉を援用するだけの理由づけ——ヘーゲルの排斥したレゾンヌマン *Raisonnement*——に満足する水準の中にあつて、遊部氏がヘーゲルの始元の弁証法にまで遡つて右の主張を確信しえていることは、けだし出色であつて、わたしとしても感激を覚えるところである。

ところで、マルクス遺稿による遊部氏の確信の内容は、しかしながら、遺憾なことであるがマルクスの思想内容の一面にとどまっているのである。氏はマルクスの「現実的資本の不断のエレメントであると同時に、その直接的結果である商品」の思想を、前に指摘しておいたところであるが、単にヘーゲル『論理学』の体系性からのみ把握している。すなわち、それは「資本論における始原と終局との始原における相互依存性であり、ここに始原における媒介性と直接性との同時存在、円環運動における前進と復帰との相即ということが認められる」(五七頁)として、端緒的商品の媒介性と直接性を、実体的資本とその抽象的 direct との関係としてのみ把握している。すなわち、遊部氏のいう「始原における直接性と媒介性との同時存在」なる句における始元とは、ヘーゲル『論理学』の始元として、「精神現象学」の始元としての「感覚的確信」でなくして、超感性的な純粹思维的な始元である。要するに、具体的なものが思惟によって抽象された抽象的 direct 性である。かくて氏自身も次のごとく述べている。——「端緒が直接的抽象的存在という規定性のうちでもつ一面性は、その具体化の進展をとげることによつて失われてしまう。かくして、それは媒介された存在となり、学的進展の線は円となる。したがつて始まりなるものは、その出発点において未発点無内容なるものであるゆえに、始原においては、それは未だ真に認識されがたく、むしろ学問の完全に展開した段階において始めて入その始原に関する完結した内容豊富な、また真理に基く認識が獲得される。」——ヘーゲル『論理学』理解としては、したがつて資本論理解の一面としては全

く正しいこの遊部氏の主張に反して、マルクスの端緒的商品は、その内容の貧弱な抽象性のものであるにかかわらず、現実的資本の外面的直接性にあるその生産物であり結果として、現に今此処に生活する感性的な我々に直接的なもの、したがって、感性的現実的には、抽象的でなくして具体的なものである。したがって、資本論叙述の進展とともにこの感性的規定性は決して消失してゆくがごときものではありえない。そしてマルクスが「現実的資本のエレメントであり同時にその結果であるとした商品」は、かかる感性的に具体的な、われわれに直接的な現実の商品である。この感性的に現実的な商品こそは、資本制社会研究の現実の出発点であり、したがって資本論の端緒の商品である。

かくて、端緒的商品の先の二重性とは、かかる直接性と、エレメントという思想規定の媒介性との二重性である。現実的資本の外面的直接性と、これを媒介として認識が到達しうる資本の実体性との同一性である。ところで、この実体的資本自体にとつては、関係は逆になり、人間意識にたいする外面的直接性は媒介的なものになり、自己自身が直接的なものである。ヘーゲル『論理学』の直接性とは、この自己自身を、謂はば内なる直接性をいみしている。遊部氏は、この内なる直接性を感性的な外なる直接性と混同して区別することができていない。ヘーゲルにおいて人間意識への直接性を出發点にしたものは『精神現象学』であった。かくて、端緒的商品の二重性としての直接性と媒介性との統一は、単に『論理学』の意味だけでなく同時に『精神現象学』的にも、すなわち更に二重に把握されねばならない。端緒的商品が過去の先資本制単純商品であるか、現在の資本制商品であるかの対立は、この論争に参加した論者の思索の不徹底にかかわらず、資本論の叙述において現実に、双方の論拠となるマルクスの言葉の幾多をそれぞれの立場で発見しえていくごとく、端緒的商品において当然に問題にされなければならぬ『精神現象学』的な二重性である。遊部氏は資本論固有のこの二重性を不問に附して、ただ『論理学』的二重性の一面のみを強調しているにすぎない。或は寧ろ、資本論固有の始元の弁証法を理解せしむるこの二重性の問題を斥けさえしている(六〇頁)。先に、氏の資本論の体系的把握の意図において、その深い根底からの理解の企てが抽象的一面性にとどまっていると指摘したこと理由は、ここに明かにされえたであろう。

ところで、遊部氏の資本論の方法論的把握におけるこの抽象的一面性は、氏のオーソドックスな手続としてのヘーゲル理解に不徹底であることに帰因する。なるほど、『大論理学』「序論」それだけの理解には、氏としても遺憾なかったも

のとしよう。にもかかわらず、この序論においてヘーゲル自身の指摘したところの、『精神現象学』との前提的關係における直接性と媒介性との問題を、氏は熟知しながら遂に不問にするほかないのであった。この問題をもとりあげて、しかる後に資本論と対照するならば、マルクスの始元の弁証法の把握ためには、ヘーゲルにおいてヘーゲルを超えた批判的理  
解が先ず成就されねばならないことを知るであらう。この困難な途を敢て進むことこそが、資本論理解へのオーソドックスな手続きでなければならぬ。遊部氏は、この困難な思弁的努力を避けたかぎり、ヘーゲル『論理学』の単なる外的適用の外見を清算しえなかつたのである。

しかしながら遊部氏の「資本論劈頭の商品について」なるの労作は、問題自体の根柢からの論証を展開するというのではなく、いはば覚え書き程度のもとして発表されたものと推察されるが、その着想において高く評価されるべきものたるを失はないであらう。——とすべき程度の水準に、わが国の資本論研究の方法論的意識は、冒劈文節に限定するかぎりでは、まったく停滞しているかのごとくである。といえ、これも、他日後悔しなければならぬ臆測であるかもしれないが。——したがって、わたしは遊部氏の右の労作について、なお多くのことを関連的に述べたい衝動を感じるが、計画的な本稿自体がこの同一問題の解明を目的とするものである以上、この註記において全部を食する要はないわけである。ただ一つ、端的商品の問題が、資本論の学的体系性を前提としてのみ、意味あること、ヘーゲルにおけると同一であるという視点に立つ今のさい、遊部氏のヘーゲル理解の不徹底からくる誤謬を一つだけ指摘しておく必要がある。

それは次の文章に現れている。——「経済学において、ヘーゲルにとってのロゴスや自由なる意志に照応するのは価値法則であり、円環運動の主体の資本である。」——だが資本論におけるロゴスは、価値法則でなくて、価値法則否定の精神である。でなければ如何にして、資本論が近代資本制社会にたいする変革の世界観の叙述でありうるか。価値法則を資本論のロゴスとすることは、資本が賃労働にたいする反省規定であることにたいする認識を、不用意にも忘れたかのごとくである。ここに氏の主体性についての方法論的自覚の不徹底を見る。円環運動の主体としての本質は、その否定的止揚者としての賃労働者階級を相関的に意味すべきことを明示しなければならぬ。この遊部氏の誤謬は、資本論の体系をヘーゲルそのままに完結的と見るところに由来するのであるから、必ずしも偶然ではない。この点、資本論にヘーゲル

『論理学』を外的に適用した武市健人氏と撥を一にする。資本論の体系はヘーゲル体系のごとく完結的に閉ぢられたものでなくて、開かれた未完結の体系である。この問題については、本誌第一巻第六号所載の拙稿、「資本論の体系性」を参照を乞うて、ここでは、その論証を省略する。

次に、序でながら、冒頭文節にたいする方法論意識を全く欠如していても、この文節に一言することを方法論的によぎなくされるといふことの一例を、たまたま山本二三丸氏（『資本論の解明』講座、第一分冊）に見る。

その「冒頭のパラグラフの意味」の標題（六七頁）の所で、氏は冒頭文節について注意すべき諸点として、(一)、「人間社会一般の合理的な生産および分配の法則を研究の対象としている古典派理論」にたいして、マルクスは資本制生産様式が支配的に行はれる社会を研究対象として明確に打ちだした。(二)、「商品が単にもっとも簡単なもつとも抽象的な生産関係を現はすというにとどまらず、この簡単な生産関係が商品の交換関係という物的関係をとって現象する」のであるが、これが「富の原基形態として現象する」といふ言葉の意味である。(三)、「労働生産物が一般に商品形態をとるのは、生産手段の私有が行はれているからであり」、「マルクスが商品を分析して、暴露したところのその奥にかくされた生産関係とは正にこれである」（五六頁）。そして「以上のような豊富な内容をば僅々一個の文章の中に盛ってマルクスは何故にその研究が商品の分析をもって始められるかということの説明している」と主張するのであるが、論理的に複雑な山本氏の文章では、マルクスの真意を氏自身が如何に理解しているかをさえ推察するに容易でない。のみならず、右に挙げた三点は、冒頭文節に拘はらしめるかぎりで孰れも、誤解を誘ふものでなければ、それ自体に誤謬を含んでゐるものである。

まず、(一)、古典経済学といへどもその研究対象は、特殊な資本制社会であつたのであり、ただ、その方法論的立場が、この研究対象を自然的な人間社会として一般化せしめただけのことであり、かかるいみで、マルクスの方法論的意識が既に冒頭文節に鮮やかに宣明されてゐるとすべきであらう。つぎに、(二)、商品の物神性が冒頭文節に既に意味せしめられてゐるとすることは卓見であるが、その背景に研究対象としてマルクスが念頭に浮べていた表象は、現実の資本制社会であつて、この「商品分析」において、その背景に研究対象としてマルクスが念頭に浮べていた表象は、現実の資本制社会であつて、この社会における賃労働者の人間的自己疎外が、物神的な商品として物的形態をとるのである。氏のごとく「商品分析」



の奥の生産関係を「生産手段の私有一般として明確に指摘すること」は、誤謬であるかぎりで、氏の自負のとおり「きわめて希である」はずであるが、同一の思想を無自覚に秘ませている人々——端緒的商品を単に資本制以前の商品とする人々——は必ずしも希でないようである。氏の功績は、かかる立場の一般的誤謬を明確化したことにあるが、さらに氏の誤謬は、かかる理解では(一)の冒頭文節における物神的把握の卓見と矛盾するということ、倍加される。のみならず(二)の論点にさえ矛盾する。矛盾に気づかず、あれも主張されており、これも意味せられているというふうに、マルクスの叙述の「文字だけを見て、その奥に秘んでいる真の意味をつかむことができていない」で、「その内容を極めて豊富」とすることは、一般に認識の最初の段階における感覺的確信の自負心に似ている。われ／＼の感覺というものは、あれもあり、これもあり、その他等々という調子で、対象を具体的に把握していると確信しているのであるが、あれでもなく、これでもない原理を抽象し得ていないかぎりでの無思想が、感覺的確信なるものの固有の本質である。この点は、ヘーゲルの『精神現象学』の端緒の弁証法として展開されるところのものであるが、冒頭文節の内容を最も豊富なものと感じながら、最も貧しくしか把握しえていないところの例証に、山本氏の所説が終らないことを切に望みたい。

## Ⅱ 第三卷における外面的直接性

資本論が「近代社会の経済的運動法則を明らかにすることを最後の窮極の目的」とした著述であることはマルクス自身がその第一巻の序文において明記してあるとおりであるが、これはマルクスが「経済的な社会構造の発展を一つの自然史的過程と解する」一般的な思想的立場にあって、その特殊化せるテーマのもとに抱かれた目的であり、そして、その方法として、一切の社会的諸関係のうち生産的諸関係が根源的であるとし、これを爾余の諸関係のなかから抽象したからであった。そして「資本主義的社会構成全体を生きたものとして——その実

生活上の諸方面、生産諸関係に固有な階級的敵対の事実上の社会的な現れ、資本家階級の支配をまもるブルジョア的政治的上層建築、自由、平等、等々のブルジョアの諸観念ないしブルジョアの家族関係をもったところの、生けるものとして——読者に明示<sup>2)</sup>することをマルクスが資本論の叙述において意図していたこと、レーニンの解説するとおりである。「研究対象を生きたものとして読者に明示する」というこのレーニンの言葉は、対象の凡ゆる面の規定性を見そこなうことなく綜合して、もっとも現実的な姿でそれを描くということ、日常のわれわれの實際生活の諸方面において直接に見られたり聞かれうる諸現象の姿のまま、対象を具体的に描くということとである。ところで、資本制的生産様式が直接にわれわれに与えられているというこの現実的具体性を、マルクスが展開したのは、資本論の第三卷においてであった。「資本制生産の総過程」と副題されているところの第三卷の、右のごとき日常的直接性のマルクスの把握については、マルクス自身の次の言葉が改めて確めてくれる。

——「第一卷においては、それ自身として考えられた、すなわち直接的生産過程として考えられた資本主義的生産過程が呈する諸現象が研究され、そのさい外部の諸事情からくる一切の第二次的影響は考察の範囲外におかれた。しかし資本の生涯は、この直接的生産過程のみをもって尽きるものではない。現実世界においては、それは第二卷の研究対象であったところの流通過程によって補充される。……この第三卷の任務について言うならば、生産と流通とのこの統一について一般的な考察を試みることは、その任務ではありえない。そうではなくて、全体的なものとして考察された資本の、運動過程から生ずるところの具体的諸形態を、見いだし記述することが、ここでは必要なのである。諸資本は、これをその現実の運動においてみれば、具体的諸形態をもつて互に対立しており、そのさい、直接的生産過程における資本の形態と、流通過程における資本の形態とは、

単に特殊な契機にすぎぬ。かくて本巻において、われわれが記述するところの資本の諸形態は、それらが社会の表面において相異なる諸資本相互間の作用や、生産当事者の日常の意識などのうえに現れているところの形態に、一步一步と近づいてゆくのである。<sup>3)</sup>」——

ここでは、第一巻および第二巻にたいする第三巻の、体系的意味と位置づけとが明示されているわけであるが、これによれば、直接的生産過程における資本の形態と、流通過程における資本の形態とが、ともに止揚されて、その特殊なる二契機にすぎなくなったところの新たな全体性が、したがって、その内在的矛盾による自己運動において展開する資本の具体的諸形態の、現実的転化の総過程の叙述が、第三巻の内容であるとされている。そして、この叙述の進展は、「社会の表面において現れるところの形態に一步一步と近づいてゆく」べきものとするれば、現実世界において今、此処に実存する具体的諸資本の現象的な相互関連こそが、第三巻において、われわれ読者のまえに生きた全体として明示されているとしなければならぬ。ところで、この全体としての現象的相互関連は、第一巻において分析された直接的生産過程の資本関係、すなわち実体的な資本<sup>4)</sup>が、外面に現れ社会の表面においてとるところの姿であるはずであるから、そして、実体的資本のこの外面性は、社会の表面において現象せられるかぎりのものとしては、単に生産当事者の日常の意識にだけでなく、一般に市民として資本制社会に生活する現実的人間のすべての日常の意識に、とくに単に消費的生活にのみ終始する人々をも例外としない社会的常識に、直接的であり、そして経験内容として与えられているところの、現象的な資本の諸形態<sup>5)</sup>とする姿の総体でなければならぬ。

1、マルクス、『資本論』第一巻、序文、長谷部訳、(青木版)七三頁、レーニン、『人民の友』邦訳、レーニン二巻選集、諸商品集成の感性的直観(その二)(梯)

## 第一巻第一分冊一六四頁。

なお、わたしは「近代社会の経済的運動法則」を特殊とし「自然史的過程」を一般としたが、これは完成したマルクスの思想体系における論理的関係であって、マルクス自身の主観的意図について言っているのではない。マルクスの経済学研究は、かれの世界観を客観化するための媒介的手段であったとするわたしの立場（拙著『資本論の学問的構造』の序文および第一論文を参照）から見ても、思想の形成順序に前後を考へるべきでない。誤解を避けて、念のため。

## 2、レーニン、『人民の友』邦訳、同右、一六四—一八頁。

## 3、マルクス、『資本論』第三巻、長谷部訳（日評版）。

本節の理解のための豫備知識として、参考のために、ローゼンベルグ（『資本論註解』第三巻、三八頁）によって指示されてある各巻の差異を引用しておく。

——直接的生産過程（第一巻）における資本の形態は、労働力の所有者にたいする、生産および流通の諸手段の所有者の支配の形態である。しかるに「社会の表面」（第三巻）においては、資本は貨幣を生む貨幣として現われている。直接的生産過程においては、剰余労働取得の資本主義的形態たる剰余価値が問題となるが、「社会の表面」においては、費用価格にたいする超過分として、全資本の所産として、利潤なるものが登場してくる。剰余価値は可変資本に比例するが、利潤は全資本に比例する。——

——資本の流通過程の分析（第二巻）によれば、流通なるものは価値形態の交替にすぎない。価値も剰余価値も流通において生ずるものでない。ところが「社会の表面」においては、利潤なるものが、商業利潤の形態で現れたり、貸付利子の形態で現われてきたりする。つまり、流通に由来する利潤の形態で現れてくる。第二巻で研究されているごとき姿における流通過程においては、貨幣および商品は、産業資本の貨幣形態ならびに商品形態である。しかるに「社会の表面」においては、貨幣と商品とは、いわば独立した生活を営んでおり、商業資本および貸付資本として登場する。——

## 4、実体的資本の概念については、拙著『資本論の弁証法的根柢』第四篇「資本発生弁証法」を参照。

われわれに直接的なこの現象的な姿は、実体的資本自体にとっての直接性ではない。これを敢えて資本の直接性というかぎりでは、それは資本の外面的直接性であり外なる直接性である。これにたいして内なる直接性こそが資本自体にとっての固有の直接性であって、マルクスが第一巻の研究対象とした「直接的生産過程」という言表における「直接性」がまさにそれにあたる。資本は生産過程にあつてのみそれ自体においてあるのであり実体的であるわけで、この実体的資本の現象世界への実存化した姿は、生産過程の自己否定的止揚の結果として、流通過程において現実化した資本の姿である。この現実的資本の外面性が、われわれに直接的なものから始めるほか不可能である。すべて

しかしながら、認識論的には、われわれ人間はわれわれに直接的なものから始めるほか不可能である。すべての研究というものの出発点は感性的直観に与えられたものである。「近代社会の経済的運動法則」の把握をころざしたマルクスにたいしても、この認識論的法則の例外は許されない。したがってマルクスが資本制生産様式の分析を始めるときの出発点も、かれ自身の感性的直観の内容としての社会の表面において資本ののっていた現象的諸関係でなければならぬはずである。流通過程に現実化する資本の現象的外面性を直観の所与とし、この主観の所与に反省を加えて客観的内容に自己転化したところに、マルクスによる現実的資本の実体的把握が成立したとせねばならない。生産過程における資本の形態としての第一巻が、まさにこれであった。とすれば、「社会の表面において現れているところの諸形態に一步一步と近づいてゆく」とマルクス自身によって言表されたことは、単に第三巻の叙述の進展過程をいみするだけではなく、第一巻から第二巻を経て第三巻にいたるマルクスの資本論全体系の叙述の過程でもなければならず、要するに資本論叙述の体系的方法は実体的資本の現実化の論理にしたがっていると見なければならぬ。資本自体の即自態から向自態を経て即自且向自的な現実的事態まで

具体化する実在的な自己運動がマルクスの頭脳に反映したものであり、資本にとって直接的なるものから我々にとって直接的なるものへの実在的運動の必然性である。そしてこれが「近代社会の経済的運動法則」としてマルクスが資本論において窮極目的としたそのものであった。したがって、この窮極目的に到達するための研究過程は、逆に現実的資本の外面性にある我々の感性的直観から出発して、叙述の出発点たる第一巻の実体的資本の認識に到達する下向の途であり、外なる直接性から内なる直接性への方法であるとすれば、資本論全三巻の体系的叙述は、研究の出発点への復帰の過程であると見るべきであるし、また同時に、この復帰的上向の体系的叙述の背後には下向的な科学的分析の往路が前提されていると見るほかない。ただし、学問の体系とは、かかる往路帰路が方向を背馳しながら同一の運動である円環を形成するところに、成立するものであるからである。

資本論のこの学的体系性の問題は本章の分析のかかわるところではない。当面の問題は、資本論における研究の出発点であり、叙述の到着点であるところの現実的資本の外面的直接性の分析であった。そして、この分析が第三巻の後半において遂げられているところに、第三巻への体系的展望を必要とすると、わたしは先に言ってきたままである。そのいみで、われわれの日常的感性的直観に与えられる現実的資本の外面性が、第三巻の叙述において、如何に展開されるにいたるかを辿って見ることは、本章のテーマである「資本家の富の感性的直観」についての理解を、徹底化するための必要な手続きであるとせねばならぬであろう。

そこで、第三巻をその篇別の順にしたがって通読してゆくと、第一篇において「剰余価値の利潤への転化」の原因が探究され、この「利潤の平均利潤への転化」を制約する資本相互間の競争という実在的契機が第二篇で取りあげられ、さらに第三篇において、剰余価値の増大してゆくという資本主義的蓄積過程の必然性にかかわらず

「利潤率低下の傾向の法則」の支配することが分析的に抽きだされており、現実的資本の具体的諸形態のうち最も一般的なものとしての利潤を剰余価値の表現とする立場から、論理的であると同時に実在的である過程として右の法則が具体化され、その現実的把握が成就されてあるわけであるが、第三篇までの叙述内容は、現実的資本はなお単に産業資本としての抽象性にとどまり、産業資本家のみが資本家階級の代表者として前面に現れていかにすぎなかった。すなわち、それは産業資本の現実的外面性にとどまる。流通の契機が実体的な資本の自己展開的な運動過程において未だ独立的な過程として扱われておらず、したがって生産の契機との対立関係は前面化されず、社会的総資本の現実的外面性に到達するには一步の距離を隔てているわけである。実際、社会の表面においては、産業資本のほかに商業資本なり銀行資本なりが、併存していて相互に関連している。これらの諸資本は、唯一の実体的資本がその現実的外面性においてとる現象的な諸形態であって、われわれの日常の生活はかかる外面性において具体的でありうるわけである。この現実的外面性に到達したのは、ようやく第四節「商品資本と貨幣資本との商品取扱資本と貨幣取扱資本との転形」の叙述においてであった。産業資本の主要な形態は生産資本であり、これが実体的資本の本来の形態であるかぎり、流通過程にある他の二つ資本形態としての商品形態と貨幣形態とを制約する。すなわち商業資本とは、産業資本の商品形態の独立化した派生的自立性にあるものであり、貸付資本とは、同じく産業資本および商業資本の貨幣的形態が派生的自立性をもって独立せるものである。マルクスの言葉によって繰り返せば、「社会の総資本を考察するならば、その一部分は、常に貨幣に移行するために商品として市場にあり、他の一部分は、商品に移行するために貨幣として市場にある。それは常に、かかる移行運動、かかる形式的姿態変換運動をなしつつあるのである。流通過程にある資本のこの機能が一

般的に一特殊資本の特殊機能として自立化され、分業によって或る特殊な資本家部類にわりあてられた一機能として固定化するや否や、商品資本は商品取扱資本または商業資本となる<sup>6)</sup>。さらに「産業資本および商品取扱資本の流通過程において、貨幣が遂行するところの純粹に技術的な諸運動は、かかる運動を、そして、かかる運動のみを、それ独自の諸操作として行う特殊な諸資本の機能にまで自立化すれば、この資本を貨幣取扱資本に転形する<sup>6)</sup>。そして、これらの商業資本および貸付資本は、産業資本と併列して、三者相互に各自の特徴的諸属性によって相互に関連しあうところの現実的資本の外面性が成立するのである。

5、マルクスを超えれば、金融資本、国家あるいは国際独占資本、等々と、実体的資本の現実化の自己展開を見る。これらは、資本論の体系的叙述の範囲外であったにしても、その体系的の範囲を越ゆべきものではないことについて、改めて論ずる必要はなからうと思はれるが、ここで、かくのごとく開かれた未完結の体系性を資本論がもっていることに、注意を促すことは必要であろう。なお、拙稿「資本論の体系性」（本誌第一巻第六号）参照。

6、マルクス『資本論』第三巻、（長谷部訳日評版・第九分冊）、二四六頁。

しかし、外面性を単に外面性として把握するかぎりにおいては、それらの相互関連は統一的でありえず、部分的なその場の場の関連の寄せ集めの総体を表象するとしても、外面性の全体は一つの混沌たる全体表象にすぎない。外面性の全体としての把握が統一的であり法則の認識でありうるために、マルクスは、階級関係および運動としての資本である産業資本を全面的に分析——これは第一巻から第二巻を経て第三巻第三節におよぶ仕事であった——したのちに、それからの派生的な資本との相互関連を実体的に基礎づけてゆくというのが第三巻の叙述方法であった。かく実体的資本の現実化は段階をとって追跡されてゆくのであるが、ここで注意すべきことは、この現実化の段階のすすむにつれて前段階において感性的に直観された事柄が、後段階にいたって隠されて眼に



見えなくなるということである。たとえば、社会的総資本の現実的運動も産業資本としての段階では、資本の三つの形態は直接に与えられていて相互に移行関連するのであるが、商業資本としての運動段階においては、貨幣資本の二形態のみが直接的所与であって、これらの生産資本との関連は、分析的思惟を媒介せずしては把握されない。さらに貸付資本の現実的運動としては、貨幣形態の資本のみが前面化して、その生産資本ならびに商業資本との関連は、その背後に隠蔽される。そこで、あたかも貨幣はそれ自体で資本であるという錯覚を、その感性的直観において生ぜしめるし、また、信用取引が資本主義的生産との関連を離れて貨幣を資本化するところから、貨幣を資本に転化するものは、直接的に流通過程の信用であって、もともと剰余価値の生産によって基礎づけられていることを見うしなうに到る。このようにして現実的社會の表面にあつては、商業資本あるいは貨幣資本は、それぞれその派生的自立性において本来の資本であるかの外見を呈し、その所有者は、単に仕事の上で産業資本家と關係を結ぶという外面性によって日常の意識が制約され、産業資本から剰余価値の一部分の譲渡にとどまる産業利潤を、商業資本独自の直接的結果であると考え *meinen* たり、資本の再生産過程の自己運動の一契機であるかぎりて取得せられる剰余価値部分である利子をも、貸付業務の結果として貸付資本家の本来の所得と思ひ *meinen* 込んだりする。しかしこれらは、社会的総資本の現実的外面性において与えられた錯覚であり幻想であるにすぎない。資本家が企業利得を受けとるのは、工業または商業に積極的に参加し資本の本来の機能を果すからであるが、そして、それが産業利潤と商業利潤とに分裂するのは、産業資本の商品および貨幣の二形態が独立するからであるが、他人よりの借入資本によつても積極的資本家が剰余価値を取得しうるということ、他人資本をその独立へと誘引し、貨幣資本を貸付資本に転化せしめ、「利潤を企業利得と利子とへの分裂」

にいたらしめることをいみするのである。

マルクスは、この「利子生み資本」の諸機能の分析のために、第五篇の全部をさいている。その第二十一章第二文節においてマルクスは述べている。すなわち、「貨幣——というのは、ここでは、或る価値額の自立的表現をいみするのであって、事実上その価値額が貨幣として実存するか商品として実存するかを問はないのであるが——は、資本制生産の上でこそ資本に転化されるのであって、この転化により或る与えられる価値額から自らを増殖し増加する価値となる。それは利潤を生産する。すなわち、それは資本家をして、或る一定の不払労働——剰余生産物および剰余価値——を労働者から引きだして取得することを得せしめる。かようにして貨幣は、それが貨幣として有する使用価値のほかに、一つの追加的使用価値、すなわち資本として機能する使用価値を受けとる。貨幣の使用価値は、このばあいには、まさに資本に転化した貨幣が生産するところの利潤に存する。可能的資本としての、利潤を生産するための手段としての、この属性において、貨幣は独自の種類の商品となる。また同じことに帰着するが、資本は資本として商品となる」のである。「このばあいには、われわれは  $C—G'$  を、より多くの貨幣を生みだす貨幣を、両極を媒介する過程なしに自らを増殖する価値をもつのである。商人資本すなわち  $C—W—G'$  においては、すくなくとも資本の運動——といっても、この運動はただ流通部面にとどまり、したがって利潤は単なる譲渡利潤として現象するのであるが——の一般的形態が現存している。だが、それでも利潤は、社会的関係なる物の生産物として現はれるのであって、単なる物の生産物として現はれない。商人資本の形態といえども、対立する両段階の統一たる一過程を、対立する二つの事象たる商品の講買と販売とに分裂する一運動を表示する。これが、利子生み資本の形態たる  $(C—G)_{\text{利子生み}}$  では消滅している」。「この利子生み資本に

おいて、資本関係は、その最も外面的で最も物神的な形態をえる。これについて、マルクスの次の長い文章を、——その一部の言葉は先に引用したところのものであるが、——現実的資本の外面的直接性をもつ性格を認識するために引用しておく必要がある。

——「 $G-G'$ ：これは資本の本源の出発点であり、 $G-W-G'$ なる範式における貨幣が両極  $G-G'$ に整約されたものであって、この  $G'$ は  $G+4G$ であり、より多くの貨幣を創造する貨幣である。これは没感性的な概括に総括された資本の本源的な一般的範式である。これは生産過程と流通過程との統一たる、したがって一定の期間に一定の剰余価値をもたらすところの、完成せる資本である。利子生み資本の形態においては、この関係が生産過程と流通過程とに媒介されないうで直接に現象する。資本が、利子の、資本自身の増殖の、神秘的で自己増殖的な源泉として現象する。物——貨幣、商品、価値——が今や、単なる物として既に資本であって、資本は単なる物として現象する。総生産過程の結果が、物に自ら具はる一屬性として現象する。……利子生み資本においては、自ら自身を増殖する価値、貨幣を生む貨幣、というこの自動的物神が純粹に作りあげられているのであって、資本はこの形態では、もはや、その成立の何らの痕跡もおびていない。社会的関係が、物たる貨幣のそれ自身にたいする関係として完成されている。資本への貨幣の現実的転化のかわりに、ここでは、かかる転化の無内容な形態のみが現れる。労働力のばあいと同じように、貨幣の使用価値は、ここでは、価値を創造するという使用価値となる。貨幣としての貨幣は、すでに潜勢的には自らを増殖する価値であり、また、かかるものとして貸付けられるのであって、この貸付は、この独自の商品にとつての販売の形態である。価値を創造し利子をもたらすことが貨幣の本性となるのは、あたかも梨の実を結ぶことが梨の樹の本性たるのと同

様である。そして、かかる利子を生むものとして、貨幣の貸手は、自分の貨幣を売るのである。

それだけでは十分でない。現実機能する資本も、機能資本としてではなく、資本自体として、貨幣資本として、利子をもたらすというふうに表示するのである。これもまた拵じまげられる。利子は利潤の一部にすぎないのに、その利子がいまや逆に資本の本来の果実として、本源的なものとして現象するのであって、利潤の方は、いまや企業者利得の形態に転化して、再生産過程に附加される単なる添加物ないし追加物として現象する。ここで資本の物神的姿態が、そして資本物神なる表象が、完成しているのである。

G—G<sub>1</sub>において、われわれが持つものは、資本の没概念的形態、生産諸関係の最高度の顛倒、および事物化たる利子生み姿態、資本自身の再生産過程に前提されている資本の単純なる姿態である。貨幣または商品が、再生産から独立して、それ自身の価値を増殖することができるということ、——これは、もっとも著しい形態での資本の神秘化である。<sup>9)</sup>——

すなわち、利子と企業者利得とへ利潤が分裂し、両者が自立的なものとして相互に対立関係に入ったことは、普通の商品市場や労働市場とならんで、資本そのものを取引し、資本自体が需給される資本市場の発生したことをいみする。と同時に消極的資本家を成立せしめ、銀行、証券取引所、その他の諸施設が、体系的に大規模の網の眼のごとく、現実的社會総資本の直接的外面に、限なく張りめぐらされるに到ったことをいみする。しかも、この全信用組織を自己の機能の結果としてもつ貸付資本は、自らが商業資本あるいは産業資本の基礎の上に立つ上層建築であるにかかわらず、自らが直接に生産過程にだけでなく流通過程にも結びついていないことからして、下部構造としての自己自身の成立過程をば完全に忘却して了う結果になることをいみする。要するに、実体的資

本は自らの現実化の過程が貸付資本を分出独立せしめる段階におよんで、自らの実体性を完全に否定して現象世界に実存するに到ったのであった。かくて現実的な社会的総資本の直接的外面性は、本質を喪失した現象としては、仮象であるとされなければならない。ここに、「最も著しい形態での資本の神秘化」が、われわれ現実的人間の直接的意識のうちに、発生する根拠がある。

7、マルクス『資本論』第三卷、(長谷部訳日評版第十分冊)二頁。

8、同右、一〇八頁。

9、同右、一〇九頁—一一一頁。

ところで、かかる「没感性的」にして「没概念的」な信用体系としての外面性においても、実体的資本の自己疎外は「最も著しい形態」で現れているにしても、いまだそれは完全な形態であるとは言えない。

資本制社会の表面においては、産業資本家、商業資本家、および、貸付資本家の各集団のほかに、土地所有者が、自らの土地所有権そのもの、土地の肥沃度、あるいは地下埋藏資源を理由として、剰余価値の分け前を要求し実現しているのを、われわれは感性的に直観している。すなわち、資本の外面的な疎外の形態として、利潤、利子のほかに地代の存在をわれわれは熟知している。かくてマルクスも、「全体として考察される資本の運動過程」から生ずるその具体的諸形態の分析を、第六篇「超過利潤の地代への転化」をもって完了するとしているのである。この運動段階の外面性において新に発生する仮象は、剰余価値の他の特殊化的転化諸形態と異なり、地代は、資本の産物としてなく土地の産物として表象されることにあるのであるが、マルクスは第七篇「所得とそれの源泉」において、現実的な社会的総資本の外面性の全き広りとしての地平 *Horizont* において、労賃は労働から、利潤は資本から、地代は土地から、という「三位一体的範式」として、諸仮象の実在的体系化が社会の

全表面に現象することを論述し、この疎外された現象の総体を、直接的所与として受け容れたまま無批判的に体系化した理論としての物神崇拜的経済学を、徹底的に暴露している。すなわち、実体的資本の現実化の完成は、剰余価値の社会的配分の完成として現実的社會の外面的ホリゾンに成就するのであるが、しかし、これと同時に、現実的資本の実体性は、すなわち生産過程における資本家と賃労働者との階級関係は、全く喪失してしまい、現実社會は、労働関係の総体としてではなく、物としての資本の關係の総体として現れることが完成する。実体的資本の實現の完成は、その自己喪失の、その自己疎外の、その物神的性格の實現の完成である。

かくて、われわれは知らねばならぬ。われわれの日常生活において感性的に直観する現実的な社会的總資本の外面的直接性は、生産過程の人的關係の隠蔽された物的關係の總体であるということ。資本家の富がわれわれの直接的な日常意識に、資本、貨幣、あるいは商品という物として現れるというばあい、先に注意を予めしておいたとおり、われわれの直接的意識が、認識の出発点としての最初の段階の意識が、感性的直観であるという認識的な意味だけに、吟味の焦点を向けるべきでなく、認識の対象としての資本家の富そのものが物として自己を疎外して実在しているという対象自体の動的構造にも、同時に留意して吟味をすすめねばならないのである。

すなわち、この点から、「資本家の富が諸商品集成として感性的に直観される」という冒頭文節の第一段の命題が、まず何を意味していたかを理解しえたとすべきであろう。そして、これは、感性的直観の所与としての対象の外面的直接性ということの要請するところにしたがって、資本論第三卷を辿ってきたことの成果であったわけである。